



Title	<書評> Shannon Winnubst ed., "Reading Bataille Now", Indiana University Press, 2006
Author(s)	宮澤, 由歌
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 243-247
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/5594">https://doi.org/10.18910/5594</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 〈書評〉

Shannon Winnubst ed.  
*Reading Bataille Now*  
Indiana University Press, 2006

宮澤 由歌

### 1 全体の構成

本書は Georges Bataille(1897-1962) に関する考察を集めた論文集である。編集者は Shannon Winnubst(ショーン・ウーナーブスト)。編者は主に二十世紀フランス哲学史の専門家だが、クィア理論や人種問題など現代社会の問題への考察も行っている。

二〇〇七年にインディアナ大学出版から発刊された本書は、Winnubst自身の研究志向が色濃く現れてくる。アントロダクションで、彼女は現代的な経験やその形成の問題に対し、新しい思考の切り口を与えるものとしてバタイユ思想を用いることを提案する。本書はバタイユの思想的著作の中でも特に「呪われた部分」三部作を扱っている。いわゆる『普遍經濟論への試み』『エロティシズムの歴史』『至高性』の三作品がそれにある。「呪われた部分」の特徴は、経済論的な枠組みのなかで至高なものが論じられる点にある。本書は、主にバタイユの経済論のなかに、現代社会の問題を解決するための可能性を見出している。

バタイユの作品が、エロティシズムや宗教などのさまざまなる具体的な問題を提起するのと同様に、本書も多様な視点からの論考が揃っている。各章には「バタイユの布置」「侵犯の快楽と神話」「身体と動物性」「至高な政治」とタイトルがつけられ、それぞれ三本ずつの論文が収められている。「バタイユの布置」では、政治的・哲学的な歴史の一部とバタイユを関連づけた論考が揃う。Jesse Goldhammer のバタイユとキリスト左派についての考察、Amy E. Wendling によるマルクスの経済論とバタイユの経済論の対比、Pierre Lamarche によるバタイユのシュルレアリスム脱退とサド受容を通した論考など、おもにバタイユの経済論を歴史化

し、そのルーツを探るような考察を多く見ることがである。「侵犯の快樂と神話」、「身體と動物性」では、編者の Shannon Winnubst を筆頭に、クィア理論やフェミニズムとバタイユ思想の特に「侵犯」概念が関連づけられ考察が試みられる。「至高な政治」は Andrew Cutrofello & Richard A. Lee Jr., Allan Stoekl のように具体的に、バタイユの一般經濟の概念が現在の經濟や政治性の問題を打破する糸口が考察されている。以上で見るよう、本書にはふたつの特徴を見いだせるだろう。ひとつめの特徴は「呪われた部分」の經濟論を軸とした論考が収められている点、二つめの特徴は論じられる領域が幅広い点である。

本書評では、たくさんのテーマを含む本書を包括的に書評で扱おうとするのではなく、特に第二章「侵犯の快樂と神話」に収められた「バタイユのクィア快樂——蜘蛛の網掛け、あるいは睡吐きとしての宇宙」を重視的に検討したい。といふのも、この論者がバタイユのエロティシズムの問題を特にクィア的な視点から取り扱い、それと同時に、九〇年代に発した比較的新しい性の思想に対するバタイユ思想の影響を探るとしても興味深い論考になっているからである。当論文の著者は本書の編者である Shannon Winnubst であり、彼女が著者のひとりとして本書に寄せた論文を見ることは、その全体的な目的と意図をより明確にするのに適切だと考えられる。

## 2 バタイユのクィア快樂——蜘蛛の網掛け、あるいは睡吐きとしての宇宙

この論文は、従来のクィア理論で援用されてきたラカンやフーコーの

「欲望」の読解から始まる。読解を進める途中で、Winnubst はセクシュアリティ概念とエロティシズム概念に関する独自の主張を行つてゐる。彼女はまずバタイユがセクシュアリティとエロティシズムを区別しエロティシズムを重要視していたことに注目する。そして近代的な主体性と不可分に存在するセクシュアリティ概念が、バタイユが批判した限定經濟の論理に属する一方で、エロティシズム概念はそれを超えた一般經濟の論理に属することを指摘する。この注目点が、この論文において最も独創的で興味深い点である。以下で詳しく見ていく。

論文のはじめの方で、Winnubst は、「欲望」の問題がクィア理論の発展の中核であり続けたことを指摘する。その上で指摘されるバタイユの影響については、次のようにまとめられている。

バタイユは、主に不在によって形作られた意識は侵犯を介しては打ち破れないことを暴き出す。禁止の法は、主体性の中核となる不在を激化させる一方である。また、禁止の法によって人は目的論の論理とそのアイデンティティ・ポリテイクスに縛り続けられる。つまり、侵犯は欲望についての限定經濟を再び主張するだけなのである。〔…〕バタイユは、禁止・侵犯、そしてその欲望・不在という主体性、あるいはそのアイデンティティ・ポリテイクス・目的論といった支配的正常のこの論理から距離をおいている。そうすることで、彼は有用性に関する限定經濟を浮かび上がらせるのである。<sup>(1)</sup>

う。実際、論文のこじままでの段階で、ラカンとフーコーの「欲望」がクイア理論によって消化される過程が論じられている。ラカンとフーコーが程度の差はあれバタイユを読んでいたことを踏まえれば、両者の思想を解読する糸口を系統的にバタイユに遡る Winnubst にわたしたちは簡単に賛同できるはずである。

ラカンの「欲望」については次のような解釈がなされている。全体性、完全性といった純粹な根源への回帰に対する欲望があり、ラカンにおいてそれは主体の構成要素になつていて、フェミニズムや人種問題の理論家たちはラカンのこのモデルをしばしば採用する。しかし、近年のクイア理論の領域でこの動向を問い合わせる議論がある。Tim Dean は、ラカンにとっての「欲望」がポスト象徴的な現象としてのみ読み込まれており、したがつて現実界と対象 a が存在論的に欲望に優先する余剰の資源として位置づけられることを指摘する。Dean は、ラカンが現実界に関して奇妙なレトリック「不在の不在」によつて欲望の定義を行おうとしていることに注目を促す。

フーコーに関しては、『性の歴史』第一巻に注目して「欲望」の解釈が進められている。フーコーはラカンの欲望の理論に批判を加えながら、同時に大きな知の枠組み、すなわち認識モデルに対する疑問を投げかける。プラトン・ソクラテスの伝統までさかのぼり欲望を歴史化するなかで、フーコーがニーチェに沿うようにして近代の西洋的な認識論に対する問題提起を行うことに Winnubst は注目する。不在の論理からすれば、わたしたちは欲望するものに対してつねに目的論的に追求しつづけなければならない。その不在の欲望についての知が、政治的・心的生ずる

る。 Winnubst は両者の解釈を踏まえたあと、ラカンに対してはバタイユのセクシユアリティとエロティシズムの区分というテーマから、またフーコーに対してはバタイユの非・知というテーマから検討を行う。両者に共通して影響を与えたと考えられるものとして、バタイユの禁止と侵犯の論者が挙げられている。レビュイ・ストロースを参照して語られる近親相姦の事例で、バタイユは、近親相姦の禁止が家族の絆をエロティックなものにして、さらにその禁止がエネルギーを持続的に他の閉じた家族のなかに流す構造を可能にすることを明らかにする。本論文では、この禁止と侵犯が、欠如(不在)と目的論の限定経済を永続化させていると解釈される。欠如(不在)がラカンによつて示唆され、目的論がフーコーによつて示唆されたことはすでに上記のとおりだが、Winnubst によればバタイユはこの現象から距離をとりそれを客観的に捉える。そしてバタイユは、欲望に代わる新たな可能性(普遍経済論上の可能性)を念頭に置き、「欲望」の存在論的な規定に限界があることを示唆し、ラカンやフーコーもその可能性を認識していた。その結果、ラカンにおいては「不在の不在」というレトリックが生まれ、またフーコーにおいては認識モデルへの問題提起という示唆があつたのだと Winnubst は主張す

では、バタイユによる欲望に代わる新たな可能性はどのように記述されているといえるのだろうか。本論文の最後の部分では、それを「バタイユのクイア快楽」として、バタイユの小説の記述の考察に場面が移る。ここで、その考察を見ていく前段階として、バタイユとラカンとの違いにエロティシズムとセクシュアリティを据える Winnubst の主張について概観しよう。

Winnubst はバタイユにおいてセクシュアリティとエロティシズムが次のように区別できることに注目する。エロティシズムは汚れたもの（特に動物性）への持続する魅力である。エロティックなものはポトラツチや供犠などにも見いだすことができ、そこにセクシュアリティという概念はまだ出来上がっていらない。Winnubst は、現代社会においてセクシュアリティはエロティシズムに還元できるとしても、エロティシズムはセクシュアリティに完全に還元することはできないと述べる。「クイアであるということは、ホモセクシュアル〔同性愛者〕であるということではない」と述べる Winnubst は、セクシュアリティについては次のように考える。セクシュアリティは深く主体性と関わっており、セクシュアリティが形成される経験の領域では、有用性が足場を得、有用性は近代的個人の欲望の流入を受け入れる。ラカンを含め、精神分析がエロティシズムをセクシュアリティに完全に還元したことを指摘し、そうではない快樂の可能性をバタイユのエロティシズムに見ようとするのである。

そして、本論文の最後の部分で Winnubst がバタイユの快樂のひとつの一例として持ち出るのは「日玉の話」である。そこでは体液、卵、血、身体などあらゆるもののが快樂の源になつておらず、欲望の法を超えるもの

が描かれている。彼女はこの物語について二つの特徴を述べる。ひとつは、登場人物たちのモノローグが描かれないために、彼らの主体性を産出するであろう「彼らは何を欲望しているのか」「彼らはそもそも誰なのか」の問い合わせに答える用意されていないことである。これは、フーコーが提起した問いに対するひとつのヒントになると考えられよう。また、ここでの快樂は欲望という深い心理的な構造や終わりのない禁止められたものよりも、血や目玉や尿といった彼らの内的な突き動かされたものというよりも、血や目玉や尿といった彼らの内的な生に対し外在化されたエネルギーに突き動かされるようにして生じているということも特徴として挙げられている。Winnubst は、これが自己の欠乏を欲し全体性や完全性を目指す不在の論理とは対照的な運動であることを示唆している。

バタイユの一般経済や非一知、そして文学に表されたエロティシズムの具体的な素材を丁寧に論じ、Winnubst はクイア理論の今後のラディカルな方向性を以下のように示唆して論文を終える。「クイアであるということは、欲望の法に応答することではない。クイアはわたしたちが誰で、何であるのか、またわたしたちはどこへ行くのかということについて何も教えてくれない。有用性とアイデンティティ・ポリティクスの倫理が拡大化するさなかで、アイデンティティの拒絶はもつともラディカルな政治性に属しているのかもしれない」。

わたしたちはこの論文に対していくらかの検討を加えることができるだろう。Winnubst の姿勢は、一九九〇年代後半にクイア理論の領域で興隆したポスト・アイデンティティ思想を継承するものだと見える。主体性に基づく戦略を取らないことをクイアの定義のひとつとする考え方

は、現在のクィア理論のなかでも浸透している考え方だ。Jo Badieの多くの理論家が主張するものもある。また、バタイコ思想の大きな特徴としての「非・知」は近代知の秩序へのアンチテーゼといふことができる。

アイデンティティなき政治に対して与える影響も決して少なくない。たゞ、バタイコの欲望に関する論考については、当論文で挙げられたもの以上に可能性が残っているといえる。

「欲望」に関する考察としてバタイコの文学作品を持ち出すことはとても有意義なことである。ただし、それだけがバタイコの「欲望」や快樂についての考察の素材としてあるわけではない。むしろ『エロティシズムの歴史』が、生前に発刊される『エロティシズム』の草稿として位置づけられる注目にすべきだ。両者は別の書物と言つてもよいほど改稿が行われている。その方法論上の差異を岩野卓司は『エロティシズムの歴史』では、科学的な視座からの対象の分析がなされているのに對し、「[...]『エロティシズム』では、科学的探求方法に対しても経験的な方法の優位を唱えている」と指摘する。『エロティシズムの歴史』でエネルギーの経済論を基盤として考察が進められたのに対し、『エロティシズム』では内的な経験を重視しながら考察が進められる。そこでは、エロティシズムに対しても「主体」や「客体」という単語を用いて科学的に記述するのではなく、まさに非・知を実践する」と「主体」も「客体」も存在しないようなエロティシズムを描き出してくるといえるのである。エネルギー論でも、大枠としての非・知の説明でも文学的フイクションでもなく、まさに内側から思考の記述を試みる『エロティシズム』における快楽の把握には、いまだその新しい解釈を生み出す可能性

が残るところがあるだろう。

### 3 おわりに

本書では、多彩な分野にわたるバタイコ思想の共有が実現した。その意義は何であると言えるだろうか。Winnubstの論考が本書の全体的な総括として完全に扱われるわけではない。しかし当論文をみてわかるように、バタイコの経済論は有用性というひとつの価値を超えるための基盤になる考え方を有している。本書が扱うテーマの広さとその注目は、バタイコの一般経済学の思想が、現代における政治や倫理の論戦に対してライバルな批判として効果をもち、さまざまな問題への支配的な見方に対する検討を行うために有意義であるといふの証左となつていると言ふよう。

#### 註

(1) pp.81-82

(2) p.91

(3) 『シャルジン・バタイコ』、2010、水声社、p.30。